

## 《伴大納言絵巻》制作の背景に関する一考察

菅名悠（京都大学）

応天門の変を題材とする《伴大納言絵巻》（以下「本作」）については、これまで多くの研究が重ねられてきたが、本作がいかなる文脈において制作されたのかという問題に関しては、未だ定説を見ない。本発表では、本作において極めて重要な位置を占めるモチーフである検非違使を取り上げて考察を行い、本作の制作背景に関して私見を提示する。

本作において、検非違使は詞書に現れないにも拘らず多くの紙幅を費やして描かれており、特に彼らが本作の冒頭と末尾という、絵巻の構成上重要な位置を占めていることは注目に値する。さらにその描写は精緻であり、彼らの顔貌、乗馬、甲冑などは周到に描き分けられている。また彼らの人員構成や装束は、当時の規則に照らして非常に正確であることが先学によって指摘されている。これらのことから、本作の制作者が検非違使の描写に対して強いこだわりを有していたことが窺われ、検非違使の華々しい活躍を描くことに本作の制作目的の一つがあった可能性が想定される。

ここで、本作の検非違使の比較対象として取り上げるべきは、後白河院が承安元年（1171）に制作させた「後三年絵」に登場する源義家ら武士であると考えられる。この絵巻は現存しないが、その内容に言及する史料や、この絵巻を参照して南北朝時代に制作されたと目される《後三年合戦絵巻》により、その姿を窺うことが可能である。これらによると「後三年絵」は、朝廷から逆賊征伐の勲功を認められず空しく帰路に就く義家主従を描くことによって幕を閉じる絵巻であったと考えられ、彼らの姿は本作の検非違使と好対照をなす。また「後三年絵」では、義家らの残虐な振る舞いが繰り返し描かれ、さらに仏教絵画に由来するモチーフによって彼らの罪業を示唆する表現も見られる。またそもそも「後三年絵」の題材である後三年合戦は、源氏が著しく勢力を弱める契機となった出来事である。これらに鑑みると、この絵巻の制作背景に、源氏を否定的に捉える価値観が存在した蓋然性は高い。

では、本作の検非違使と「後三年絵」の義家主従の表現の落差は何を意味するのか。日本史学の成果によると、本作の制作時期と想定される 1170 年代には平氏が検非違使庁を掌握していたといい、当時の観者にとって検非違使は平氏の武力を象徴するモチーフであったとも考えられる。そうだとすると本作の検非違使は、源氏とは対照的に繁栄する平氏の武威を示しているという解釈が提示し得る。ただし本作は、平氏の武力を手放しで称揚しているわけではないと思われる。本作において伴大納言逮捕の判断を下したのは朝廷であり、検非違使はあくまで朝廷の命の下で働く武力装置として描かれていることには注意する必要がある。

以上を勘案して、本作は朝廷を支える平氏の武威を顕彰するという性格を有しながら、武士に対する朝廷の優位を表すという側面をも有していた可能性を指摘したい。

## 観心寺僧形坐像再論—唐代禅宗史の立場から

松原瑞枝（同志社大学）

真言宗の古刹観心寺には、元慶7年（883）成立の『観心寺勘録縁起資財帳』に「唐聖僧像」と記述される、中国唐代の僧形坐像が伝来している。日本で「聖僧」としてのみ受容されてきた本像は、山名伸生氏によって千手寺像、善願寺A・B像、そして米ミネアポリス美術館蔵の僧形坐像という4点の類例が示されており、各法量・構造の一致、胡貌梵相と漢人相の区別などから、一具の天台/密/禅宗祖師像として造像された可能性が指摘されている。

発表者は昨年、山名氏の論を更に進めて、これらの僧形坐像群は北宋嘉祐6年（1061）成立の禅宗史伝書《伝法正宗定祖図》に表されている禅宗祖師群像と、師弟が相対する姿勢、視線の高低差、胡跪坐などの点で強い親近性を持つことによって、禅宗祖師像である可能性が高いことを明らかにした（「観心寺僧形坐像の平安仏教美術史上の意義について—禅宗文脈を手がかりに」『美学芸術学』32号）。さらに、唐で制作された本像が真言宗寺院に伝来していることを踏まえ、①観心寺と関わりの深い嵯峨天皇皇后橘嘉智子が唐僧義空を招聘していること、②義空は禅僧であり、当時禅宗で伝法祖師信仰が高まっていたこと、③義空が当時中国仏教界に甚大な被害を齎した会昌の廃仏を避けて、日本にこれらの像を持ち込んだ可能性が高いことを指摘した。しかしながら、この論証は、観心寺像を含むこれら5体の坐像群を禅宗文脈に位置付ける上では必ずしも十分ではないと思われる。

そこで本発表では、本坐像群の図像と義空関連の史料および先行研究を改めて考察した上で、前回の論で不足していた点を補い、結論の蓋然性を高めることを目的とする。

そのために第1章では、観心寺像を含む僧形坐像群を、《伝法正宗定祖図》および至和元年（1054）成立の図像である高山寺蔵《達磨宗六祖像》と比較することによって、これらの諸像が禅宗祖師像と図像的に非常に近い関係にあることを確認する。第2章では、改めて観心寺像の歴史的な文脈を検証し、①観心寺と橘嘉智子との関係、②義空の禅宗における立場、③当時の中国における廃仏の状況、という3点を確認する。第3章では、①②③を補強する間接的な証拠に言及する。すなわち、①については、『本朝高僧伝』において嘉智子のみが禅に深い理解を示していたと語られること、②は、義空宛の書簡『高野雑筆集』において、義空は中国で仏法僧の三宝紹隆、つまり仏像の造像に関わっていたとされること、③は、同雑筆集の中で、如意や幡など僧の威儀を示すものが義空に贈られており、同様に彫像も齎された可能性が高いこと、そして『歴代名画記』や各請来目録等によれば、中国唐代において、僧形の絵画・彫刻が多く制作されていたこと、などである。以上の考察により、本像を含む坐像群は密教の時代に齎された最初期の禅宗祖師像である蓋然性が高く、平安時代における禅宗文化の流入を考えるうえで重要な像であると結論づける。